



Title	文学の視座からの青木繁における美的仮象の創造 : 明治期のロマン主義受容の射程
Author(s)	中野, 久美子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49404
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	中野久美子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第22608号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	文学の視座からの青木繁における美的仮象の創造—明治期のロマン主義 受容の射程—
論文審査委員	(主査) 教授 出原 隆俊 (副査) 教授 中 直一 教授 橋爪 節也

論文内容の要旨

洋画家青木繁の〈仮象〉の創造の独自性を、文学に携わる周辺の人々である蒲原有明、森鷗外、高山樗牛、北村透谷、夏目漱石らとの関わりなどから検証しようとするものである。

第一章「青木繁と蒲原有明—起源・神話・象徴」では、青木の代表作である《海の幸》を水平神話の一つと読み取る。有明は、〈自然〉の変形を描いた青木の神話画と対峙して内なる自己へと向かっていくのは、青木の描いた〈仮象〉の世界であった。

第二章「青木繁と『明星』—詩と画の融合」では、青木の『明星』同人たちとの交流に触れ、詩と画の融合という『明星』の目的は、神話画の集大成である《わだつみのいろこの宮》へと至る青木自身の目的でもあった。

第三章「青木繁と鷗外・樗牛—ハルトマン美学の受容」において、青木を洋画家に導いたハルトマンの言葉に着目し、明治期のハルトマン受容について概観しながら、その言葉の出典を検証した。同時に、青木がなぜ〈仮象〉概念に反応し、それが青木の芸術にどの

ように作用してきたのかを考察した。一つの手掛かりとして、シラーの「美的教育」の中に類似した“言葉”を発見した。それはハルトマン一色の時代にあってシラーの重要性を再認識するものであろう。

第四章「青木繁と『文学界』—思想家透谷との接点」において、明治浪漫主義の先駆者である北村透谷を思想家として捉え、透谷の思想と青木の芸術観の共有点を探ることを試みた。透谷の理想とする「美術と思想の抱合」こそ、青木を透谷の追随者と見做す人々の共有の捉え方であることを指摘する。

第五章「青木繁と夏目漱石—崇高・美・天才」において、漱石が高く評価した青木の最後の神話画《わだつみのいろこの宮》を取り上げ、漱石の視点からみた青木における美的観念の独自性を考察する。崇高を作物の評価基準に置いた漱石は生涯に一度有難い心地のする「崇高な絵」を描きたいと望んでいた。そこに漱石が青木の《わだつみのいろこの宮》を評価したのかを知る手掛かりとなる。漱石は、海底の女と男の画を前にして、崇高経験である神的なものに遭遇した。

論文審査の結果の要旨

青木繁の画業について、主として文学とかかわる側面から、その成り立ちと意味を考察しようとするもので、論の組み立てそのものが、従来の枠組みに捉われない、意欲的で問題性をはらんだものである。青木その人の文章のみならず、青木繁をとりまく人々の文章から解明しようとする試みは十分に評価されてよい。従来の美術史研究の青木に関する研究上の不備を補う意味においても貴重である。たとえば、《海の幸》に与えられた有明の詩を読み解こうとすることも興味深い視点である。

取り分けて青木に大きな影響を与えた〈仮象〉という概念をめぐる、本人自身がハルトマンに由来する言葉だとしていたものを、第三章において綿密な検証において、シラーによるものではないかとの見通しを示した。このことは、青木を研究するにあたってこの言葉以外にも波及する可能性をはらんでいるだけではなく、さらにはより大きな問題にも発展することも考えられ、大きな成果といえることができる。

一方、方法的には、青木繁が蒲原有明や夏目漱石に影響（あるいはインスピレーション）を与えた側面を論じた第1、5章と、逆に『明星』や鷗外、樗牛あるいは北村透谷が青木繁に与えた影響を論じた第2、3、4章とでは、影響関係を論じる方向が異なっているが、その点について必ずしも明確な説明が為されていない。また、有明の詩の読解についての記述は生硬であることは否定できず、別の解釈の余地もある。透谷との関連も「接点」と言い得るかどうかが疑問の残るところである。漱石が青木の絵画を見て「品位がある」と感じたということから、直ちに〈漱石が青木の「思想」を読み取った〉という主張が導き出されるとは言い難い。

美術史の観点からは、《海の幸》の水平構図を日本的な「開闢説」、《わだつみのいろこの宮》の垂直構図を「創世説」による西洋の神話画の構図を日本神話に転用したものとする事は、構図を論じるには、事例の収集や比較検討が乏しく、図式化しすぎているように思われる。水平構図は西洋の神話画・宗教画にも多いし、《わだつみのいろこの宮》について海野弘氏がバーン・ジョーンズの《キリストの磔刑》との関連性を示唆していることにも言及していない。画家本人が絵について書き残したことは、作品理解の補助であって、本人の発言と描かれた作品とが矛盾することは多々あり得ることであり、留意が必要である。

このように多々問題点はあるが、青木繁の絵画を、青木その人の文章のみならず、青木繁をとりまく人々の文章から解明しようとした意図は明確であり、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。